PB-18.
加速度脈波による脳室周囲低吸収域の病態に関する検討

（老年病科）
赤沢麻美，岩本俊彦，杉山　壮，木暮大嗣，桜井博文，高崎　優
（第2内科）
高沢謙二

【目的】頭部CTでしばしば観察される脳室周囲低吸収域（PVL）の循環生理学的病態を明らかにする目的で，PVLの広がりと加速度脈波との関係よりその病因・病態を検討した．

【方法】通院患者213例（平均年齢77.8歳，男105例）を対象として頭部CTおよび加速度脈波検査を施行した．PVLの広がりはvan Swietenの分類に準じて4grade（0，1，2，3）に分類し，評価は前角周囲白質（D部），体部前方白質（A部），体部後方白質（P部）の3部位で行ない，これに対して加速度脈波より得られたb/a，d/aを循環生理学的指標とした．

【結果】Grade3のPVLはD部で9例，A部で11例，P部で15例あった．各PVLともgrade0は若年で，痴呆の頻度も低かった．b/aはD部のgrade3が他のgradeより有意に高かったが，A，P部では一定していなかった．また，D部優位のb/aはP部優位より高かった．

【結論】計測値b/aが高度のPVLのうち，前方部分でのみ上昇していた成績から，この部位のPVLには動脈壁の伸展性低下に関連した病態が考えられ，一方，後方部分のPVLには他の病態が示され，白質変化の病因・病態は部位によって異なる可能性が示唆された．

PB-19.
膜性腎症の臨床像に関する検討

（腎臓科）
○長岡由女，竹口文博，篠　朱美，吉野麻紀，日高宏実，岡田知也，松本　博，中尾俊之

【目的】当科で加療された膜性腎症症例の臨床像及び治療方法と腎予後について検討した．

【方法】対象は平成4年11月から平成12年3月までに，腎生検によって膜性腎症と診断された39名（男性28名，女性11名，年齢25～81歳）である．患者の生検時における臨床像について検討した．また3ヶ月以上観察し得た34名において治療方法別に患者を2群に分け（副腎皮質ステロイド，免疫抑制剤使用群（A群12名），非使用群（B群22名））腎予後について検討した．

【結果】悪性腫瘍の既往がある，もしくは生検時に合併していたものが6名だった（大腸癌2名，胃癌1名，慢性骨髄性白血病1名，肺癌1名，乳癌1名）．生検時クレアチニンクリアランス（Ccr）は89.5±39.3 ml/分，尿蛋白量は3.5 g/日以上13名，1～3.49 g/日24名，1 g/日未満2名だった．血尿の頻度（尿中赤血球5/HPF以上）は33.3%だった．A群では生検時と観察終了時の尿蛋白量に有意な減少は認めなかった（5.6±3.4 g/日→3.8±3.9 g/日）．一方